

2016年3月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

真理の道＝中道

1. 概要

増谷文雄編訳『阿含經典2』（ちくま学芸文庫）の「実践の方法（道）に関する經典群」から、「諦相応」の章の「5 如来所説」を学んでみたいと思います。（同書、p. 283～290）

ここでは、釈迦牟尼世尊の初めての説法（初転法輪）について述べています。

この経文は、4つに分けて考えることができます。

第一の部分で、釈迦牟尼世尊は中道・八正道を説きます。（同書、p. 283）

第二の部分で、四諦を説きます。（同書、p. 284）

第三の部分で、釈迦牟尼世尊が四諦を悟るにいたった経緯が述べられます。（同書、p. 284～287）

第四の部分で、釈迦牟尼世尊の説法で、コーンダンニヤ（憍陳如（きょうじんによ））が悟ったことが述べられます。（同書、p. 287～288）

今回は、第一の部分を学んでみたいと思います。

2. かようにわたしは聞いた

多くの経文が「かようにわたしは聞いた。ある時……」という定型句で始まっています。漢訳の経文では、「如是我聞。一時……」となっています。

この形式が生まれた経緯について、増谷文雄博士の解説を学んでみましょう。

第一結集では摩訶迦葉（まかかしょう）が議長となり、律の誦出者は優波離（うぱり）、経の誦出者は阿難（あなん）となりました。始めて経の誦出が行なわれたときのことです。

「摩訶迦葉が阿難に問うていった。

『仏の説法は、そのはじめ、何処で説かれたか』

阿難は答えていった。

『かようにわたしは聞いた。ある時、仏は波羅奈（はらな）なる仙人住处鹿林中にましました』

阿難がこの語を説いた時、五百の比丘はみな下地（げじ）し、胡跪（こき）し、涕零（ていれい）して言った。

『わたしが仏に従って、面受し見法するところ、今にしてすでに聞けり』

摩訶迦葉が阿難に語っていった。

『今日より、一切の修妬路（しゅとろ、経）、一切の毘尼（びに、律）、一切の阿毘曇（あびどん、論）、初めにみな、〈かようにわたしは聞いた。ある時〉と称せん』

阿難も、『しかるべし』といった。」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 051）

こうして、経文の冒頭の定型句が生まれたのでした。

3. 二つの極端

(1) 経文

「かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、バーラーナシー（波羅捺）のイシパタナ・ミガダーヤ（仙人住处・鹿野苑）にましました。

そこで、世尊は、五人の比丘たちに告げて仰せられた。

『比丘たちよ、出家したる者は、二つの極端に親しみ近づいてはならない。その二つとは何であらうか。

愛欲に貪著（とんじゃく）することは、下劣にして卑しく、凡夫の所行である。聖にあらず、役に立たないことである。また苦行を事とすることは、ただ苦しいだけであって、聖にあらず、役に立たないことである』」（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 283）

(2) 五人の比丘

釈迦牟尼世尊は、仏陀となって始めての説法の対象に、かつて共に苦行に励んだ五人の比丘を選んだのでした。

この五人の比丘は、世尊が突然苦行を中止して、尼連禪河で身を浄め、村娘スジャータから乳粥の供養を受け、ピッパラ樹（菩提樹）の下で坐禅に入ったのを見て、世尊が墮落したと思って立ち去り、他の土地で苦行を続けていたのです。

(3) 二つの極端に近づくな

釈迦牟尼世尊は五人の比丘に「出家した者は、二つの極端に親しみ近づいてはならない」と言いました。二つの極端とは次の通りです。

- ・愛欲に貪著すること。
- ・苦行を事とすること。

(4) 修業の目的

当時のインドでは、人生の最高目的は、輪廻の束縛を脱して、苦悩のない自由の境地を獲得することであり、これが悟りであるとされていました。

「苦悩のない自由の境地」は、現代の私たちにとっても、獲得したい境地であると思います。

(5) 役に立たない

ここに「役に立たない」とあります。

これは「苦悩のない自由の境地を獲得する」という修行の目的を達成するための役に立たないということです。愛欲に貪著しても、苦行を事としても、苦悩のない自由の境地を獲得することはできないのです。

(6) 愛欲に貪著することは役に立たない

釈迦牟尼世尊が、「愛欲に貪著することは、下劣にして卑しく、凡夫の所行である。聖にあらず、役に立たないことである」と説いたとき、五人の比丘はそうであろうとうなずいたと思います。だからこそ、世俗の生活を捨てて苦行の道に入ったのです。

(7) 苦行を事とすることは役に立たない

釈迦牟尼世尊が、「苦行を事とすることは、ただ苦しいだけであって、聖にあらず、役に立たないことである」と説いたときは、五人の比丘は耳を疑ったに違いありません。自分たちがこれまでもっとも大事にしてきた苦行が否定されたのですから。

しかし、苦行を重ねたけれど目的を達成することは出来なかったという事実が、五人の比丘にもあります。ここは釈迦牟尼世尊の言葉を聞くほかなかったにちがいません。

4. 悟りへの道は中道

(1) 経文

比丘たちよ、如来は、この二つの極端を捨てて、中道を悟った。それは、眼を開き、智を生じ、寂靜・証智・等覺・涅槃にいたらしめる。(同書、p. 283)

(2) 中道を悟る

釈迦牟尼世尊は、愛欲への貪著は出家した時に捨てました。出家してから長い間、苦行を事としてきましたが、これも捨てました。

世尊は二つの極端を捨てて「中道」を歩みました。中道を実践して、眼を開き、智を生じ、寂靜・証智・等覺・涅槃にいたりました。「中道」は、修行の目的を達成するために役立つ道だったのです。

釈迦牟尼世尊は、ご自身のこの体験を踏まえて、はるばると五人の比丘を訪ねてきたのです。

5. 意味深い教え

釈迦牟尼世尊が、初めて説いた教えが「中道」です。

庭野日敬師は、「釈尊が、四十数年にわたってなされた八万四千という数多いご説法の最初に、この『中道』を説かれたことは、じつに意味深いことだといわねばなりません」(庭野日敬著『法華經の新しい解釈』佼成出版社、p. 317)と、述べておられます。

6. 中道とは

中とは、偏らないということです。同時に、固定しないということでもあります。偏らず、固定せず、もっとも適切であることを、中というのです。

中道とは、中を実践する道です。人に応じ、状況に応じ、目的に応じて、もっとも適切な道を実践することです。

7. 中道とは八正道

(1) 経文

比丘たちよ、では、如来が、眼を開き、智を生じ、寂靜・証智・等覺・涅槃にいたらしめる中道を悟ったというのは、どのようなことであろうか。それは、聖なる八つの道のことである。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。

比丘たちよ、これが如来の悟りえたところの中道であって、これが、眼を開き、智を生じ、寂靜・証智・等覺・涅槃にいたらしめるのである。（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 283）

(2) 中道とは八正道

ここに、中道とは八正道であると説かれています。八正道とは「正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定」の八つの実践道です。

八正道は、中道という一つの道を、八つの観点から分析したものと言ってよいと思います。

(3) 三十七の修行道

釈迦牟尼世尊は、修行の道をさまざまに説いておられます。

- ・ 八つの正しい道（正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）（前出）
- ・ 七つの覺支（念・摺法・精進・喜・輕安・定・捨）（同書／同群／覺支相應／1 比丘、p. 199）
- ・ 四つの念処（身・受・心・法）（同書／同群／念処相應／1 アンバパーリ（菴羅）、p. 212）
- ・ 五つの根（信・精進・念・定・慧）（同書／同群／根相應／1 清淨、p. 227）
- ・ 四つの正勤（未生の惡の不生のための努力・已生の惡の斷滅のための努力・未生の善の生起のための努力・已生の善の住立のための努力）（同書／同群／正勤相應／1 東方、p. 247）
- ・ 五つの能力（信・精進・念・定・慧）（同書／同群／力相應／1 東方、p. 250）
- ・ 四つの如意足（欲・精進・心・觀如）（同書／同群／如意足相應／1 此岸、p. 252）

以上の三十七の修行道は、三十七菩提分法と呼ばれています。

いずれも、中道であることに変わりはありません。

8. 「中道」ではないもの

「中道」と間違われやすいけれども「中道」ではないものがあります。

- ・「愛欲に貪著する」と「苦行を事とする」ことの真ん中あたりに中道があると思う人もありますが、そうではありません。間違った道の中に正しい道を探してみても、見つけることはできません。
- ・「対立し矛盾する二つの極端に偏らない」ことが中道であるという解釈がありますが、そうではありません。対立するものの中には、妥協点はあるかもしれませんが、正しいものがあるわけではありません。
- ・政治の世界で、右派や左派、保守や革新のどちらにも偏らない政策を行う政治を、中道政治と言いますが、仏教における中道はそういうことではありません。中道政治は、右派から見れば左に偏っていますし、左派から見れば右に偏っています。対立軸が移動したにすぎません。

9. 実生活における中道の実践

(1) 家庭における中道の実践

家庭においては、自分、親、子、兄弟姉妹など家族の全員が、安らかな心で、明るく活動しているとき、幸せであると言っていいでしょう。

家族全員の幸せにつながるように、自分のあり方を考えて実践する。それが家庭内での中道の実践であると思います。

(2) 職場における中道の実践

職場には、業務上の目的があります。職場のメンバーは、この目的を達成するために、自分の役割を果たし、また互いに協力し合います。これが業務上の中道の実践であると思います。

職場で働くメンバーには、それぞれ自分の目的があります。業務上の目的を達成しながら、各自の目的も達成しなければなりません。職場の目的とメンバー各自の目的を同時に達成できるような働き方をすることも、中道の実践であると思います。

(3) 人間関係における中道の実践

自分は、多くの人々と人間関係を結びます。

このとき、自分、相手、自分と相手を包む世間のすべてに、良い影響を及ぼすように行動することが、中道の実践になると思います。

(4) 自分における中道

自分の人生・生活が、真の人間としての道にかなっていると同時に、人々のためにお役に立っているとき、中道の道を歩んでいると言えるのではないのでしょうか。